列島保全への課題

（番外編）

碑（いしぶみ）の記憶①

津波被災地に残る「先人の想い」

東日本大震災は、人口密集地で建物や橋が倒壊した阪神・淡路大震災、山の斜面崩壊で地域が分断孤立した新潟県中越地震に対し、地震による大津波が沿岸部を壊滅させた「津波型」災害だ。東北地方は過去何度も大津波に襲われ、東北各地には、悲劇を忘れず後世に伝えたいとの願いを込めて建てられた「津波記念碑」が多数残る。いしぶみ碑が語り伝える先人の想いを次号から「碑（いしぶみ）の記憶」で連載する。

「契（ちぎ）りきな　かたみに袖を絞りつつ　末の松山　浪こさじとは」（清原元輔）

百人一首にある有名な歌。末の松山は仙台市と塩釜市の間の多賀城市にある。869年（貞観11年）に貞観津波が襲った際、末の松山は津波が越さなかったという。「千年に一度」と言われる東日本大震災で引き合いに出されるのが貞観津波で、以後も津波は何度も東北を襲った。

明治以降東日本大震災の前までで、甚大な被害が出た津波は明治三陸地震津波（明治29年6月）／昭和三陸地震津波（昭和8年3月）／チリ地震津波（昭和35年5月）が挙げられる。青森・岩手・宮城3県の「津波石碑」に関する調査で、主にこの3大津波に関して残る石碑は、317基が確認されている。

3県の津波石碑のうち、碑文が刻まれている石碑は198基あり、碑文が後世に伝えるのは、61％が津波の予兆、避難、居住場所に関する教訓を刻印し、38％は悲惨な被害状況を刻み込んでいる。

教訓が刻印された碑を見ると、「地震があったら油断するな」「地震があったら高い所に集まれ」「津波に追われたら高い所に上がれ」「ここより低い所に家を建てるな」などが刻まれている。

津波石碑の象徴的な例が、3大津波の都度大きな被害を受け続けた岩手県釜石市両石町に見られる。

両石地区は狭く細長い谷と岩石海岸からなり、V字谷のため津波エネルギーが集中しやすい地形。このため明治三陸地震津波と昭和三陸地震津波で全滅に近く被災し、チリ地震津波でも湾正面の家屋は1戸を除いて全半壊または流失という大被害を受けた。

谷が深い地形で移動に適した場所が少なく、明治三陸地震津波後は高地移転しなかった。再び全滅近い被害を受けた昭和三陸地震津波の後、高地移転を実施。地盤高7メートル以上の山地を切り崩し、90戸の移転先を4カ所に分散して確保した。しかし、その後また、分家や移住者が低地に定着し始め、チリ地震津波で被災した。

そして今回の東日本大震災だ。津波は恋の峠近くまで達し、これまでの津波を超える浸水範囲となり、高地移転地の家屋も一部を除いて流失、倒壊の被害を受けた。

両石地区には3基の津波石碑が国道45号脇に並べて建立されていた。そこはかつての津波到達点で、津波除けの標石としての役割を担っていた。東日本大震災の津波も石碑を越える地域まで達し、津波除けの標石としての役割を果たしたが、現在は、今回の津波到達点、恋の峠上り口付近に3基並んで移設された。

表1　津波石碑の分布

県名	明治津波（明29）	昭和津波（昭8）	明治・昭和津波	チリ津波（昭35）	その他・不明	計
青森	0	7	0	0	1	8
岩手	113	83	11	8	10	225
宮城	7	62	3	6	6	84
計	120	152	14	14	17	317

出典：津波工学研究報告第18号（2001年）他

表2　碑が語る教訓の分類

分類項目		説明	石碑の数	割合
教訓	予兆	津波襲来の前兆現象を警告	123基	36%
	避難	避難の方法を訓示	57基	17%
	居住	居住場所に関する戒めを訓示	31基	9%
記録		津波被害の悲惨な様子を記録	131基	38%
美談		救護活動への尽力復興への努力を称賛	2基	1%
			延べ344基（実数198基）	100%

両石海嘯記念碑
明治三十五年七月
北海居士廣田忠蔵撰并書

恋の峠上り口付近に集められた両石地区の3基の津波石碑。高架橋は自動車専用道路、土手の上の道路が国道45号

昭和八年三月三日
津浪記念碑
大地震の後には津浪が來る
美彦

海嘯記念碑
従三位伯爵南部利恭出書画
明治二十九年六月十五日

両石海嘯（かいしょう）記念碑

長文の漢文を刻んだ「両石海嘯（かいしょう）記念碑」を読んでみる。海嘯とは津波のことである。

《碑文の意訳》

この碑はいつか無くなる。しかし、この恨みを忘れてはいけない。たとえ（碑が）雨に洗われ、苔に蝕され、文字が磨り減ろうとも、津波被害を昔からの言い伝えとして子孫に伝えよ。

明治29年6月15日の津波災害は三陸沿海百里の地に及んだ。両石一村でも荒れ狂う大波の中で790人が命を落とし、生き延びた者わずか204人という痛ましいものだった。強い石弓をもって海水を射ても海の神の力を封じることは難しく、今もって死んだ者の恨みを減ずることはできない。涙にくれて生き残った者は、文を刻んで弔うことで冥福を祈る。石は小さいけれど大きな功徳である。恨みは消え去ってもこの碑が消えることはない。

一切は掃き尽くされ　あちらこちらに　青い波が広々と広がり　墓にはちょうど良い

生死の岸を離れ　底なしの船に棹差し　土塊（つちくれ）は暗く　月は明るく海は果てしない

◇　◇

「両石海嘯（かいしょう）記念碑」は明治35年7月とあり、横には別の「海嘯（かいしょう）記念碑」、さらに昭和8年3月3日と刻んだ「津浪記念碑」が並ぶ。碑には象徴的にこう刻まれている。

大地震の後には津浪が來る
美彦

参考資料：国土交通省東北地方整備局道路部ホームページ「津波・被害・津波石碑情報アーカイブ」より

国土と日本人
災害大国の生き方
大石久和著

本書では日本の国土の地形的・社会的特徴や国土への働きかけの歴史が明らかにされています。日本人は今、何を考えるべきか、に気づくことの出来る好著。
発行：中央公論新社
定価：882円（本体840円）